

『グローバル天理』第1号（通巻13号）掲載論文要旨

井上昭夫 巻頭言 新「教養」概念の創出と天理大学

日本の各大学はいま、思い切った経営の合理化と個性ある教育内容の充実が求められる。宗教私学である天理大学においては、私学の個性と社会の普遍性を橋渡しするために、まず関係者が誇りを持って共有できる新しい時代が求める「教養」という概念を創出していく必要がある。

太田登・中井精一 「天理教原典とやまとことば（13） 方言資料と比較研究：『奈良県風俗誌』 [2]」

今回は、天理教の原典研究をすすめるうえで必要とされる方言資料から「奈良県風俗誌」を選び、その概要について紹介したが、今回からは、この「奈良県風俗誌」の詳細について、特に教祖が言語形成期を過ごされた三昧田を含む天理市南部の朝和村に関する記載に焦点をあてて、特に名詞に関する記載事項について確認した。

笹田勝之 「天理教における悟りの構造について—他宗教との比較を通して—（12） 第一章「知ること」について[7]」

知覚・知識・知恵という「知ること」の三段階が、「行なうこと」と関わりつつ、直線的ではなく、円環的に、立ち戻りつつ自己展開をする。そして知識と知恵の区別、さらに、知恵においても分別知と無分別知の区別があることに触れた。

堀内みどり 「天理異文化伝道（12）天理教のコンゴ伝道 [11] —初代会長時代〈1963—1967〉 [5]」

社会主義化が急速に進む中、飯田は教会建築用地の獲得交渉に成功した。次に布教認可を得るために、いろいろと手段を尽くしたが、大統領に会うことすらできない日々が続いた。しかし、元政府高官だったコンゴ人の入信で事態は急転。彼の助言を受け書類を作成、提出。審問のあと布教認可の運びとなる。こうした手続きと同時に、飯田はコンゴ人へ教理を伝えるために「天理教教義問答書」の作成に着手していた。

金子昭 「天理経営学—その歴史・哲学・展望— (13) 思想編 宗教と経済・経営[7]」

精密機械工業の製作所（ミツトヨ）の創設者である沼田恵範は、もともと仏教の伝道者になろうと考えていた。彼は、結果としては、仏教伝道協会を創設して、仏教の外護者となり、日本のアショカ王を目指した。世界のホテルや旅館に配付されている『仏教聖典』は彼の仏教伝道事業の成果である。

佐藤孝則 「エコロジーの思想と実践 (12) 米大統領選に挑んだ二人のエコロジスト」

21世紀をリードすべき米国の新大統領、ブッシュ氏は混迷の中で誕生した。エコロジストのゴア氏は環境問題に秀でていたが、それは選挙の大きな争点とはならず、むしろ彼の政策遂行の曖昧さだけが残った。ところが、もう一人のエコロジスト、ネーダー氏の環境政策は明快で、竹を割ったような判断をする。そのためゴア氏に投票されるべき票の一部がネーダー氏に流れ、結果的にブッシュ氏の得票数を相対的に増加させたことが、ゴア氏の敗北につながったと考えることができる。二人の明暗はここで分かれた。

金子珠理 「ジェンダー女性学情報 (12) ケアの倫理[2]」

エコフェミニズム (ecological feminism) の本質とは何か、ディープ・エコロジー (deep ecology) との対比において探る。天理教教学においては、平和学 (Peace Studies) をも射程に入れたソーシャル・エコフェミニズムとの接点を探究すべきではなかろうか。

小滝 透 「天理比較神秘論への試み (13) 人間と宗教[4]」

今回はトインビーの文明史観を例に取り、世界宗教の在り方とその限界を語ってみた。また、そのことから現在の西欧文明がかつてのそれとは別の文明ではないかと論じてみた。次回はこれまで述べた宗教史の展開を日本に当てはめ論じてみたい。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教 (13) 教練と軍隊精神」

十六世紀、東と西で、軍隊の歴史に大きな変化が起こった。兵士の訓練の中に徹底したドリルが取り入れられたことである。こうした繰り返し訓練が目指したのは、迅速な行動能力と同時に、あるいはそれにも増して、兵士に必要な精神的な性向を養うことだった。戦闘といった

極めて特殊な場でのストレスを解消すること、その意味でこれは、一種の精神療法的な役目を果たしたといってもよい。

深川治道 「エコロジカル インタビュー (9) 「循環型社会システム実現を目指して—多治見市」

岐阜県多治見市は 1999 年に「循環型社会システム構想」を 策定した。それは、大量生産・大量消費・大量廃棄から脱却し、「生産→消費→資源化→再商品化→消費」という流れを持つ社会システムの実現を目指すものである。この構想では具体的に 2015 年までに 3 段階の目標年次と実施項目が設定されている。今回は多治見市役所を訪れ、このシステム策定に至る経緯や現状 などについて話を聞いた。

小椋 博 「宗教・スポーツ・賭け (13) 高校野球中継とスポーツの偶然性 [2]」

高校野球のテレビ中継にも、視聴率をめぐる激しい競争がある。視聴率を稼ぐため、ほとんどのスポーツ中継においてと同様、高校野球中継においてもゲームとしての本質が伝えられるよりも、スポーツ共同体に関するあらゆる言説が毎年、繰り返し放送される。スポーツゲームの基本的要素であるノマド的・偶然的・賭けの性質は脇に置かれる。要するにゲーム展開に固有の「生成」の側面が弱いという べきであろう。

上杉武夫 「都市の再生に向けて——アメリカ通信 (13) サステイナブルの意味を問う」

「持続可能性」は 21 世紀の都市計画におけるキーワードだろう。しかし、過去数十年にわたって多くの人々はその本来の意味を誤解している。「持続可能性」は、自然と人の共存であり、全体的／統合的である。持続可能なコミュニティの原型は、インドや中国にあるような貧しく厳しい状況下で見出される。21 世紀のアメリカ社会においてはリサイクル文化に焦点が置かれる べきだ。私は林業と農業が環境と文化のギャップを埋めることができるだろうと考える。

特別連載・シンポジウム 「天理スポーツを語る」

井上昭夫 「「元の理」からスポーツを考える」

「元の理」の中の「する」「みる」「楽しむ」の視点から、「陽気ぐらし」の関連で現代スポーツを考えてみる。「楽しむ」は「元の理」の「陽気遊参」における「遊参（遊山）＝遊び」に通じる。「遊び」は通常の意味に加え、拘束なく自由に動くことも意味するが、こちらが本質的である。「元の理」における「遊び」もこちらを意味しており、それは悟りへの道程における営みとして捉えられる。スポーツは「遊び、仕事、聖」の三者の様相を備えていると言われる。スポーツにおける神秘的な不思議体験と、信仰者の神秘的な悟りや覚醒体験には接点がある。また、スポーツは「するスポーツ」と「見るスポーツ」の二極化が起こっている。スポーツを「する人」と「見る人」が共に楽しみ、真の「遊び」を遊ぶための、新しい視点からの研究が必要とされる時代がきている。